

ガザル (I) ——イクバルのウルドゥー詩 (II) ——

松村 耕光* 訳

はじめに

本稿は、ムハンマド・イクバル (Muhammad Iqbal 1877-1938) の、ウルドゥー語で書かれた定型抒情詩ガザル (ghazal) の翻訳である¹⁾。

イクバルのウルドゥー語ガザルは、第1ウルドゥー詩集『鈴の音 (*Bāng-e Darā* 1924年)』、第2ウルドゥー詩集『天使ガブリエルの翼 (*Bāl-e Jibrīl* 1935年)』、第3ウルドゥー詩集『モーセの一撃 (*Ẓarb-e Kalīm* 1936年)』に合わせて100篇余り収められている²⁾。本稿では、『鈴の音』収録のガザルの中から12篇を選んで訳出した。

『鈴の音』は3部構成になっており、第1部にはヨーロッパ留学 (1905-1908年) 以前の作品、第2部には留学中の作品、第3部には留学以後の作品が収録されている。各部とも、ナズム (nazm 特定のテーマで書かれた詩) のあとにガザルがまとめて収録されている。ガザルの収録数は、以下の通りである。

第1部 13篇

第2部 7篇

第3部 8篇

今回は、第1部から4篇、第2部から5篇、第3部から3篇選んで訳出した³⁾。『鈴の音』に収録する際、イクバルによって手を加えられ、初出時と異なる形になったガザルもあるが、本稿では、煩雑さを避けるため、改変箇所には言及しなかった⁴⁾。

* 大阪大学大学院言語文化研究科教授

1) ガザルは複数の詩句より構成される。詩句は二つの半句より成っている。1半句が1行である。詩句が意味の最小単位で、詩句の数に制限はない。第1詩句の句末と第2詩句以降の後半句の句末で押韻される。脚韻箇所の後ろには、普通、リフレインが続く。ガザルの最終詩句には詩人の雅号が詠みこまれる。例外もあるが、詩句と詩句との間に意味上の関連はなく、詩句はそれぞれ意味的に独立している。ガザルは基本的には恋愛抒情詩であるが、イクバルは思想表現の手段として用いており、その思索的な詩風は、ウルドゥー・ガザル史上、きわめて特異である。

2) 『モーセの一撃』には5篇のガザルしか収録されていない。詩集に収録されなかったガザルも数多く存在している。

3) ガザル番号 (1) から (4) が第1部、(5) から (9) が第2部、(10) から (12) が第3部のガザルである。

4) イクバルの詩の書誌的研究はあまり熱心に行われているようには思えないが、『鈴の音』第1部、第2部の詩のテキストに関しては、以下の書が詳しい。

Gyān Chand, *Ibtidā' ī Kalām-e Iqbal: bah Tārīḥ-e Māh-o-Sāl*, Hyderabad (A. P.), 1988.

ガザル (1) ⁵⁾

存在の花園をぼんやりと見ていてはならぬ
見る価値のあるものだ、何度も何度も見るがよい
おまえはこの世に火花のように現れた
無常の存在に騙されぬよう気を付けよ
見られるには値しない私だが
私の想いを見て欲しい、待ち続けていることを知って欲しい
もっと見たいという思いがおまえの目を開いたら
道という道に愛しい人の足跡を見るがよい⁶⁾

ガザル (2) ⁷⁾

巢を作るために藁を運んで来なければならぬ
稲妻が燃やしたくなるような藁を
ああ、天は折ってしまった
巢を作ろうと思った枝を
72の共同体の人々とおまえは付き合い
誰に対しても盃を変えたりしない⁸⁾
心に願望を持ちたいものだ
私を破滅させたいと天が思うほどの
まず一粒一粒麦を集めて積み上げよ
そうすれば稲妻が燃やそうとやって来るだろう
友よ、獵師を気の毒に思ったのだ
さもなければたった一粒の麦のために罫にかかりはしなかった
この花園では心の鳥は自由の歌を歌うべきではない
ああ、この花園は自由の歌を歌えるような場所ではない

5) 初句 Gulzār-e hast-o-būd nah bēgānah-wār dēkh. 初出年等不明。

6) 「愛しい人」 神のこと。

7) 初句 Lā'ūn voh tinkē kahīn sē āshiyānē kē liyē. 初出、文芸誌『宝庫 (Makhzan)』1901年11月号。『宝庫』は、1901年にシャイフ・アブドゥル・カーディル (Shaikh 'Abd al-Qādir d. 1950) がラホールで発刊した文芸誌。

8) 「72の共同体」 「我が共同体は72の共同体に分かれるであろう」とイスラームの預言者ムハンマドが述べた、という伝承がある。

ガザル (3) ⁹⁾

何と言えよかろうか、花園からどうして離れてしまったのか
 欲望の罠にどうして囚われてしまったのか¹⁰⁾
 驚くべきことである——私は最も邪悪な存在なのに
 どうして栄誉の衣が授けられたのか¹¹⁾
 シナイ山では謁見が求められたが
 おお、心よ、どのような結果になったか、おまえは知るまい¹²⁾
 願望を持ちたくないというのも願望である
 心の鳥が願望の罠から解放されたことなどあろうか
 見ることのできる者はこの世でもあなたを見ることができる
 終末の日に姿を見せるというあなたの約束は苦しみなどもたらそうか¹³⁾
 完璧な美であるからこそ顕現したのではないのか
 そうでなければ帳の内に潜んでいた者が姿を現すことなどあろうか¹⁴⁾
 おお、あの人に会えぬ苦しみよ——死という治療法が残っているではないか
 医師は頭がおかしいよ——私を治療不能と見做すとは
 おお、明敏な眼よ、知っているか——花が
 どのようにして土から現れ、鮮やかな衣を纏ったのか
 私の行動がわざわざ調べられたのは私を辱めるためであった
 何が起き、何故こうなったのか、すべて明白であったのに¹⁵⁾
 私が消え去る光景は見ものであった
 あの人との対面がどのようなものであったか、何と言えよかろうか

ガザル (4) ¹⁶⁾

マジュヌーンは街を出た——ならば砂漠からも出るべきだ
 姿を見たいのであれば、ライラーさえも捨てるのだ¹⁷⁾
 説教師よ、捨てるとは

9) 初句 Kyā kahūn apnē chaman sē main judā kyōn kar huā. 初出、文芸誌『宝庫』1903年2月号及び『眼差しの矢 (Khadang-e Naẓar)』(ラクナウー)1903年2月号。

10) アダムの楽園追放に言及している。

11) 人間が被造物の長にされたことを指している。

12) シナイ山で神に姿を見せるよう懇願したモーセの故事に言及している。

13) 「あなた」神のこと。

14) 「帳の内に潜んでいた者」神のこと。

15) 最後の審判の日に人間の行動記録が調べられるが、そのようなことをしなくても神はすべてを知っているということ。

16) 初句 Majnūn nē shahr chhōrā tō ṣaḥrā bhī chhōr dē. 初出、文芸誌『宝庫』1905年5月号。

17) 神の姿を見たいのであれば、神以外の物とは縁を切れということ。

マジュヌーン (Majnūn) とライラー (Lailā) は有名なアラビア悲恋物語の登場人物。ライラーと結ばれなかったマジュヌーンは狂人となり、砂漠をさまよった。

現世を捨てたのなら、来世も捨てるということだ
模倣するくらいなら自殺の方がましなのだ
自分で道を見つけるがよい——ヒズルのことは忘れるべきだ¹⁸⁾
ベン同様、おまえの口にあるのは他人の言葉
他人のものを自慢してはならぬのだ¹⁹⁾
恋の苦しみが心になければ言葉に魅力などあるものか
恋の犠牲者でないのなら、身悶えするのはやめるのだ
夜露のように花で泣き、花園から立ち去るがよい
花園に居続けようとは思うなよ
一人きりになること——それが恋の決まりである
偶像寺院もカアバ神殿も教会もすべて捨ててしまうのだ
取引ではないのだ、これは礼拝なのだ
愚か者よ、応報のことなど忘れるがよい
理性が心を守るのは良いことだ
しかし時には心を放っておくことも必要だ
他人に依存した人生など人生と言えるのか
世間の評判を生きる支えにするのはやめるのだ
おお、モーセよ、何度も何度も頼むのは無作法というものだ
絶対服従とは要望したりしないことなのだ²⁰⁾
もし説教師が飲酒の正当性を証明すれば
イクバルは酒を飲むのをやめよう

ガザル (5)²¹⁾

人生など一呼吸^{ひと}
呼吸とは空気の波であり、空気の遁走である
薔薇が生きたことは微笑むことであると言うと
蠟燭はこう言った——「それは悲嘆の涙を流すことである」²²⁾
存在の秘密はそれを知る者がいなければ謎のままである
謎が解ければ、秘密を知る者が残るのみ²³⁾
カアバを巡礼する者たちに——おお、イクバルよ——誰か尋ねてみるとよいのだ

18) 「ヒズル (Khizr)」道案内人を意味する。ヒズルは不死をもたらす泉までアレクサンダー大王の道案内をしたとされる伝説上の人物。

19) ベンが書き記すのは、ベン自身の言葉ではなく、書き手の言葉である。

20) シナイ山で神に姿を見せるよう懇願したモーセの故事に基づいている。

21) 初句 Zindagī insān kī ik dam kē siwā kuchh bhī nahīn. 初出年等不明。

22) 開花は微笑むことを意味し、蠟燭の流れる蠟は涙と見做される。

23) 「存在の秘密」世界は儚いが、人間の存在(魂)は不滅ということのようである。

ザムザムの水以外に聖地の土産があるのかどうか²⁴⁾

ガザル (6) ²⁵⁾

神よ、「理性」殿に少しは狂気を持つことを教え給え
「理性」殿は繕うのに夢中だが、私は衣服のことなど気にしない²⁶⁾
世界創造の朝、私が愛の焰を得たときに天使たちはこう言った——
「おまえは墓の燈明のようだ、周りには誰もいない」
心よ、ここでは友は得られない——ここは見知らぬ国なのだから
おまえが私に求めているものはこの天の下では得られない
アラブ人の建築家は世界の何処にもない共同体の砦を作った
我々の共同体の砦は国土の共通性に基づいてはいないのだ²⁷⁾
何処から来て何処へ行くと言うのか——来世を特別視するのは誤りだ
万物に我々は現れる、決まった故郷などはない
『宝庫』の編集者に誰か私の言葉を伝えて欲しい
「事を為しつつある国々は詩などに関心を持ったりしない」

ガザル (7) ²⁸⁾

稲妻、焰、火花の中にはあなたの輝きがある
月、太陽、星の中にはあなたの光がある
空の高みも地の低みもあなたに属し
うねる大海原も動かぬ浜辺もあなたに属している
話す意欲を法はどうして抑えることができようか
私は言いたいことを比喩に隠して話すのだ
人間の内部で目覚めているもの——それは深く眠っているのだ
木、花、動物、石、星の中では
恋で流した涙の熱気が私を焼き尽くしてしまった
涙の小さな火花の中には大きな焰が燃えていた
来世の褒美をもらいたいとは思わない
私は損失を利益と考える商人なのだ

24) 「ザムザム (Zamzam)」 カアバ神殿の側にある泉の名。

25) 初句 Ilāhī ‘aql-e khujastah-pae kō zarā sī dīwānagī sikhā dē. 初出年等不明。

26) 〈恋の〉狂人は上着を引き裂く。

27) ムスリムの共同体は信仰に基づく共同体であるということ。
「アラブ人の建築家」イスラームの預言者ムハンマドのこと

28) 初句 Chamak tērī ‘ayān bijlī mēn ātish mēn sharārē mēn. 初出、文芸誌『宝庫』1906年12月号。

じっとしていられないのが水銀というものだ
その中には——神よ——誰の心の懊悩が入り込んでいるのか
イクバルよ、「おまえは私を見られない」の言葉を聞いて私は黙り込んだ
会えない苦しみに打ちひしがれたこの私——逢瀬を求める力など何処にある²⁹⁾

ガザル(8)³⁰⁾

おお、この世の宴よ、どんちゃん騒ぎには楽しませてもらったが
悲しい光景がなかった訳ではない
愛の街で安らぎを得た
長い間、哲学の砂漠をさまよっていた土埃は
おお、酒よ、おまえはとてもベールが気に入っている
葡萄のベールから抜け出して酒瓶のベールに覆われた
美の魅力に学識は打ち勝つことができなかった
世界中の賢者たちはみな無知だった
イクバルよ、私は西洋で見つけることができなかった
インドの月の^{かんばせ}顔の美女が持つものを

ガザル(9)³¹⁾

ベールの取られる時が来た、愛しい人が見られる時が来た
沈黙に覆われていた秘密が明かされる時が来た
酌人よ、隠れ飲む時代は去った
全世界が酒場となり、誰もが酒を飲む時代となるであろう
恋の放浪者は再び町に住むであろう
裸足のままではあるが、新しい茨の道を歩むであろう
待ち侘びていた耳にヒジャーズの沈黙が遂にこう告げた
「砂漠の民と結ばれた契^{ちぎり}は再び固められるであろう」³²⁾
私は天使たちからこう聞いた——砂漠から出て東ローマ帝国を滅ぼしたあの獅子が
再び目を覚ますであろうと³³⁾
酌人が私の話を酒飲みたちの間ですると

29) 「おまえは私を見られない」シナイ山でモーセが神に姿を見せるよう懇願した時の神の返答。

30) 初句 Yūn tō aē bazm-e jahān dīl-kash thē hangāmē terē. 初出年等不明。

31) 初句 Zamānah āyā hai bē-hijābī kā ‘ām dīdār-e yār hōgā. 初出、文芸誌『宝庫』1907年3月号。「1907年3月」とガザル冒頭に記されている。

32) 「砂漠の民」ムスリムのこと。

33) 「あの獅子」ムスリムのこと。

酒場の長老がこう言った——「はっきりとものを言う者は辱められるであろう」
 西欧の住人たちよ、神の街は商店ではない
 おまえたちが金貨だと思っているものは贗金だと判明するであろう
 おまえたちの文明は自分の短剣で自殺するであろう
 か細い枝に作られた巣はすぐに壊れるであろう
 一群の弱々しい蟻が花卉の舟を作るであろう
 荒波に揉まれても、海を渡りきるであろう
 チューリップが自分の傷を薔薇園の薔に見せている
 恋に苦しんでいる者と見てもらえんと考えて³⁴⁾
 唯一者であったものを——おお、眼よ——おまえは多数者として示した
 誰がこのようなおまえを信用するであろうか
 「この花園の自由な者たちの足が土から抜けなくなっている」と山鳩に言う
 薔が言った——「この者は我々の花園の秘密を知っているに違いない」³⁵⁾
 何千人もの神を恋する者たちが荒野をさまよっているが
 私は神の僕^{しもべ}を愛する者の僕となるであろう
 これは無常の宴の決まりである——おお、心よ——眼を動かすのすら罪である
 動揺して名誉を保てるであろうか
 漆黒の夜、取り残された隊商を私は助け出すであろう
 私の溜息は火花を散らし、私の息は焰を降らすであろう
 おまえの人生の目的が単に自己顕示であれば
 火花のようにあつという間にこの世から消えなければならないであろう
 イクバルの居場所を聞いてはならぬ——以前と変わらぬ有様である
 どこかの道端で、待つ苦しみを味わっていることであろう

ガザル (10) ³⁶⁾

恋に狂った夜鶯^{ブルブル}よ、おまえの嘆きは不十分
 まだ嘆きは胸に納めておくがよい³⁷⁾
 分別のある理性は成熟しているが
 分別のある恋は未熟である
 恋はニムロデの焰に恐れることなく飛び込んだが
 理性は屋上で焰を眺め続けている³⁸⁾

34) チューリップの花の内部にある黒い部分は、恋の懊悩で焼け焦げた跡だとされている。

35) 山鳩(qumrī)は糸杉を恋慕しているとされる。糸杉は詩の中ではよく「自由な糸杉(sarv-e āzād)」と表現される。季節の影響を受けず、常緑で、真っ直ぐ、高く伸びることなどから「自由な」と形容される。

36) 初句 Nālah hai bulbul-e shōrīdah terā khām abhī. 初出年等不明。

37) 「夜鶯(bulbul)」求愛者の象徴。

38) ニムロデ(ナムルード Namrūd)王が、偶像崇拜を批判するアブラハム(イブラーヒーム Ibrāhīm)を焰の中に投じさせたという故事に基づいている。

恋は使者の指示ですぐに行動を起こすのに
理性にはいまだに指示の意味が解らない
恋は自由と時代の変革を求めてやまぬのに
おまえは変わらぬ日常の偶像寺院で礼拝に勤しんでいる
酒を断る言い訳を聞き、酌人は怒ってこう言った
「おまえはまだ結果を心配しているのか」
不断的努力こそ人生を量る秤であるのに
おまえはいまだに朝夕の数を勘定している
春の雨雲よ、いったいつまでわずかな夜露を施すつもりか
私の山で咲いているチューリップの盃は空^{から}である
彼らはアジャム産の酒を飲み、私はアラブ産の酒を飲む
酒飲みたちは私の盃を避けている³⁹⁾
そよ風が花園のイクバルの様子を教えてくれた
「最近捕えられたあの者はまだ罠の中で暴れている」と

ガザル(11)⁴⁰⁾

おお、待望されている真理よ——現世^{かりそめ}の衣装を纏って姿を見せておくれ
おまえを恋い慕う私の額には何千もの平伏が待ち構えているのだから⁴¹⁾
どんちゃん騒ぎを楽しむ者となれ——おまえは歌声である——耳と親しむ者となれ
沈黙した楽器の中に身を潜めている歌など歌と呼べるのか
大事にしまっていてはならぬ——おまえの鏡は
壊れると鏡の作り手には一層素晴らしく見えるのである⁴²⁾
蠟燭の焰の周りを回りながら蛾が言った——「かつてのような感銘を与える力は
おまえの焰の物語にも、私の憔悴の物語にもはやない」⁴³⁾
大きな過ちを犯した私がどこで安住の地を得たかと言えば
それはあなたの慈愛に満ちた許しの中であった⁴⁴⁾
恋にあの熱気はなく、美にあの魅力はない
マフムードには身悶えがなく、アヤーズには美しい巻き毛がない⁴⁵⁾
かつて平伏した時に地中から声がした
「おまえの心は偶像と親しんでいる、平伏したところで何になる」

39) 「アジャム産の酒」非イスラーム的な思想などを指している。アジャム(‘ajam)は、非アラブ地域、特にペルシアを指す。

「アラブ産の酒」イスラームの教えを指す。

40) 初句 Kabhī aē ḥaḡīqat-e muntazar nazar ā libās-e majāz mēn. 初出年等不明。

41) 現世に姿を現した真理の前で額ずきたいということ。

42) 神への恋によって苦しまなければならないということ。「鏡」は心、「鏡の作り手」は神を意味する。

43) 蠟燭の焰は愛しい人の、蠟燭の焰に飛び込んで焼け死のうとする蛾は求愛者の象徴。

44) 「あなた」神のこと。

45) マフムード(Maḥmūd d. 1030)はガズナ朝の君主。アヤーズ(Ayāz)はマフムードが寵愛した美青年。

ガザル (12) ⁴⁶⁾

網の中でも花園の鳥たちは歌を忘れなかったが
胸中の嘆きは口の外には出なかった
見ただけでは心の懊悩は収まらなかった
朝の嘆きは続き、深夜の溜息も絶えなかった
神も偶像も、偶像寺院やカアバ神殿に敵対する者も消え去った
神の獅子アリーのような人物も、アブー・ラハブのような人物も消え去った⁴⁷⁾
アジャムの撥に私の楽器は虐げられ続けたが
忠節を貫き、私はアラビアの歌を歌い続けた

46) 初句 Tah-e dām bhī ghazal-āshnā rahē tū'irān-e chaman tō kyā. 初出年等不明。

47) 信念、信仰が消え去ったということ。「神の獅子」は第4代カリフ、アリー（'Alī）のこと。アブー・ラハブ（Abū Lahb）は、イスラームの預言者ムハンマドの叔父で、ムハンマドに敵対した人物。